
如月風月の冒険記

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

如月風月の冒険記

【Nコード】

N1746C

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

このお話は、『FBIから来た女』シリーズに登場するオリキャラである如月風月と、『ハヤテのごとく!』に登場する女キャラ2人とのちよっとした冒険記。もしかしたら、『ちよっと』ではないのかもしれないが・・・

第01話：回り出す齒車／運命の齒車とは、英語で言うとdestiny

このお話は、『FBIから来た女』シリーズに登場するオリキャラである如月風月が主人公のお話です。

楽しんでいただければ幸いですので、どうぞよろしく。

第01話：回り出す歯車、運命の歯車とは、英語で言うとd e s t i n y g

時は春休みの4月初日。

4月には初っ端から相手にウソをついても良いエイプリルフルがあつたり（悪い人はこの日をイタズラに使う）、なんだかんだで楽しめる期間である。

そして、4月は学校の新学期が始まる時期という事もあり、新たな出会いも待っているという月だ。

そして、1人の少女にも出会いの日が待っていた。

今、運命の歯車が回り始める・・・

第02話：突然の落とし穴に落ちるとは、英語で言うとhole drop

桜並木の山の下で、少女と少年が仲良くお花見をしていた。

彼女の名前は如月風月。きふじつき

少年探偵団の一員であり、元氣一杯な女の子だ。

ちなみに彼女は、名探偵コナンのファンフィクション小説『FBIから来た女』シリーズのオリジナルキャラクター（略すとオリキャラ）である。

彼女と一緒にいるのは、同じくオリキャラの常盤暁。とけいひら

風月の彼氏であり、遠回しに彼女を心配させてしまう困り者である。

さらに当の本人は全く気にしていないのだからタチが悪い。

で、どうして2人がお花見をしているのかというと、以前お花見に行った時、風月が間違えて缶チューハイを飲んで倒れてしまったのだ。

その上騒動起こり、とてもお花見できる状態ではなくなったという事である。

ちなみに暁は飲んでいない。

詳しくは『FBIから来た女：3』猛火・赤の章』のファイル280～281『4月の花見の大騒動』前・後編』を参考にしてほし

い。

そんなワケで、今日2人はお花見をやり直しているのである。

常盤暁

「全く・・・なんでオマエは缶チューハイなんか飲んだんだよ・・・」

如月風月

「ゴメン・・・ラベル見てなかったから・・・」

暁

「まあ、こうやってお花見やり直せるから別にいいけどな。」

風月

「そうだね。」

そうやってしばらく談笑していた2人であったが、突然暁がある事に気づいた。

暁

「あ、しまった。お菓子が切れた。」

たくさん食べていたせいか、お菓子が切れてしまったのだ。

お花見といえば、そういう物がつき物である。

暁

「オレ、ちょっとコンビニまで買いに行ってくる。」

そう言うと、暁は山を駆け下りていった。

風月は1人となった。

風月

「ふあゝ、ヒマだなあ・・・」

突然のハプニングとは、こういう時に起こるものである。

風月はすっかり、オニギリを落っことしてしまった。

風月

「あ・・・」

オニギリは風月の後ろを転がっていく。

風月

「ま、待って！」

風月はオニギリを追いかけたが、オニギリは少し転がった後で急に消えた。

風月

「あゝあ、穴に落ちちゃったか・・・え？」

風月は驚いた。

展開で言えば、昔話の『おむすびころりん』だ。

しかし、驚くところはそのではない。

なんと、オニギリが落ちたと思われるその穴が、人1人楽に通れるくらいに大きな穴だったからだ。

風月

「あ、あ・・・」

風月は何とか止まろうとするが、勢いがつきすぎてそれもムリというものだ。

ズッ！

風月はバランスを崩した。

風月

「キヤアアアアアッ・・・」

風月は真っ逆様に、穴の中へと落ちていった。

第03話：如月風月は伝説の卒業生、伝説の生徒とは、英語で言うとI e g e r

しばらく落下を続けて、ようやく足下が見えて来た。

ドスン！！

風月

「イッタク・・・」

「何や、ウチら以外にも落ちて来たヤツがおったんかいな・・・」

風月

「・・・え？」

「まあ、いいんじゃないの？面白いし・・・」

風月の前に、見知らぬ2人が現れた。

風月

「あ・・・あ・・・」

「ん？」

風月

「キャーッ！！！！」

風月は叫び声を上げた。

風月

「不審者イヤ〜ッ！！私は彼氏いるのよ〜っ！！変な事はしないで〜っ！！」

ドカバキゴスッ！！

風月は両腕を振り回して、2人を叩いた。

「ちょ、ちょ〜待て！！ウチらは不審者とちゃうわ！！」

風月

「え？」

あいざわ さくや
愛沢咲夜

「ウチは愛沢咲夜。」

はなびし みき
花菱美希

「私は花菱美希だ、不審者ではない。」

風月

「ご、ごめんなさい！こんな穴に落ちる人なんて他にいないと思ったから、つい・・・」

咲夜

「まあ、さっきのツッコミはスジ良かったわ。ところで、自分の名前は？」

風月

「私は如月風月・・・帝丹小学校1年B組です・・・」

美希

「な、何！？如月風月だつて！？」

咲夜

「何や、美希さん知ってるんか？」

美希

「ああ、如月風月といえば、白皇学院高等部を3歳で入学して6歳で卒業した、マリアさんをも越える超有名な卒業生！！確かあの時は、いなかったが一緒に卒業した子がいたらしいとヒナから聞いたが・・・」

風月

「あ、それ、私と暁の事です・・・」

美希

「やはり君だったのか。生徒会長を3期とも務め成績もブッチギリ、最優秀生徒に贈られるプラチナ時計を3つも持っているという強者で、あまりのスゴさにその事は歴代生徒会長名簿にしか記されていないため生徒会長しか知る事ができないという伝説の子は・・・」

風月

「はい、今はちよつと帝丹小学校に通ってます。っていうかよくそこまで知ってますね。」

美希

「私は政治家の娘だから・・・調べるのは得意。ちなみに今日の君の下着はピンク、フリルのついたカワイイヤツだな。」

バツ！！

風月

「な、なんでそんな事まで調べてるんですか!!」

美希

「調べるのは得意。っていうかさつき君が落ちて来た時に見た。ちなみに結構似合っている。」

風月

「あ、ありがとうございます。ところであなた達はどうしてここに？」

咲夜

「イヤな、2時間ほど前に上でお花見しとったんやけど、転がったオニギリ追いかけてったらこの穴に落ちたんや。」

美希

「私も上に同じく。」

ズテッ!

風月はこけた。

風月

「まさか、私と同じように穴に落ちたなんて・・・」

咲夜

「まあ、同じ者同士うちゅう事で仲良うやろうや!」

美希

「まずは奥に行ってみよう。脱出の手掛かりがあるかもしれないか

らな。」

そう言うと、美希は懐中電灯を照らした。

照らされた先に、うつすら大きな穴が見える。

風月達3人は歩き出した。

第04話：美少女3人娘の大ピンチ！危機状態とは、英語で言うとemergency

しばらく洞窟内を進んでいた風月達だったが、先頭の風月が突然ピタリと止まったため、咲夜と美希は止まりきれずにぶつかった。

ドカドカ！！

咲夜

「うわっ！！」

美希

「キャッ！！」

咲夜

「何やねんな、いきなり止まりおってからに……」

美希

「一体何なの？」

風月

「2人共、見てください……」

風月が指差した先を見て、咲夜と美希は絶句した。

3人の目線の先には、見た事もない世界が広がっていたからだ。

美希

「な、何なんだこれは……これが本当にあの落とし穴からつながる場所か！？」

美希は激しく驚いている。

それよりも驚いているのは風月だった。

目が点になっている。

一方咲夜は、あまり驚いていないようだ。

風月

「あの・・・どうして咲夜さんは驚かないんですか？」

もつともな疑問である。

咲夜

「ああ、その事が・・・実はウチな、これとよう似たゲームをナギん家^ちでやった事があるんや。」

風月

「それって、何てタイトルですか？」

咲夜

「ん？『星のカービィ^{スーパーデラックス}SuperDX』や。」

美希

「なぜ『SuperDX』の部分が英語なんだ？確かそこはカタカナ表記だったと思うのだが・・・」

咲夜

「細かい事は気にすんな。」

風月

「とりあえず、奥に進みましょう。奥に進めば脱出の手がかりが見つかると思います。」

咲夜

「そやな。」

美希

「行くか。」

しばらく進んでいた風月達は、大きな宝箱が置いてあるのを見つけた。

美希

「あら、宝箱があるわよ。」

咲夜

「ホンマにカービィの『洞窟大作戦』みたいやな・・・まあ、ナギの家でやったヤツは激しく難しかったけどな・・・」

風月

「そんなに難しいんですか？」

咲夜

「そやねん・・・最弱モンスターのハズのワドルディが火イ吹くし、

能力盗んで逃げるハズのタックが真正面から体当たりしてくるし・
・明らかにウイングを使わな越えられへん場所があるし、何でかポケモンのルカリオがおったりするし・・・」

ちなみに咲夜がやるカービィは、ナギが任天堂に頼んで特別にNINTENDO ニンテンドーゲームキューブ GAMECUBE版のカービィを作らせた物で、2007年バージョンであつた。

そのため、本来出ない者もモンスターとして出たりするので、難しさは特注品である。

風月

「あの・・・美希さん・・・」

美希

「ん？」

風月

「『ぶつちゃけありえな〜い』って突っ込んだら負けなのでしょう
か？」

美希

「多分ね。」

風月

「・・・とりあえず、宝箱を開けましょう。」

そう言つて、風月は宝箱を開ける。

中には地図らしき物が入っていた。

風月

「この洞窟の地図みたいです。」

咲夜

「ホウ・・・これで進みやすくなったなあ。」

美希

「そうね。」

そんな事を言いながら歩いていると、大きな花が咲いていた。

美希

「わゝ、大きな花ね。」

美希は花に近づいていく。

咲夜

「アカン！それはラブリーフラワーいうて、人食い花なんやー！」

途中で宝箱から手に入れたモンスター図鑑を見ながら咲夜が叫んだ。

美希

「え？」

次の瞬間、美希は花に食いつかれた。

ガバァ！！

美希

「キャーッ!!」

パクン!!

美希は花から足だけが出ている状態で、ジタバタ暴れている。

風月

「咲夜さん!早く助けないと・・・このままじゃ美希さん、飲み込まれちゃいますよ!!」

咲夜

「もう飲み込まれかけてるけどな・・・」

そう言いながら、咲夜はハリセンを取り出した。

咲夜

「くらえ、人食い花あ!!」

ドカツ!!

咲夜はラブリーフラワーを殴る。

しかし、衝撃で口が少し開いただけであり、ラブリーフラワーは飲み込みやすくなったと言わんばかりにあっという間に美希をペロリと飲み込んでしまった。

ゴクン!!

風月

「何やってるんですか、咲夜さーん!!」

咲夜

「し、しもたあゝ！美希さんが食べられたゝ！！」

ペロリン。

美希を飲み込んだラブリーフラワーは、咲夜と風月の方を向いた。

クルツ・・・

咲夜・風月

「ゲツ・・・」

美少女3人娘・・・

大ピンチ！？

第05話：危機を打破する能力、超能力とは、英語で言うとESP

美希を飲み込んだラブリーフラワーは、咲夜と風月の方を向いた。

咲夜・風月

「う．．．」

ラブリーフラワーが次にやろうとしている事はわかっている。

ラブリーフラワーは、咲夜と風月も食べる気なのだ。

ガバア！！

咲夜・風月

「キャーッ！！」

ガッ！

ババッ！

咲夜と風月は何とか避けた。

咲夜

「何とか避けれたな．．．」

風月

「でも、このままじゃいずれ捕まります！この花を倒す方法を考えると同時に、美希さんも助けなければ．．．」

咲夜

「ほな、ウチがコイツの相手をする！アンタはその間にコイツを倒す方法を考えるんや！！」

風月

「はい！！」

そんなワケで、咲夜にラブリーフラワーを任せ、風月は花を倒す方法を考え始めた。

咲夜

「くらえええっ！！」

バシイイン！！

咲夜はハリセンでラブリーフラワーを殴打する。

しかし、攻撃があまりラブリーフラワーには効いていないようだ。

咲夜

「な、何なんやコイツ！ウチのハリセンが全く効いてへんし・・・」

ラブリーフラワーは咲夜を睨む。

それはまるで笑っているようにも見えた。

咲夜

「くっ・・・」

ボゴッ！！

と、ラブリーフラワーが地面から抜け出した。

どうやら、この花は動く事もできるようだ。

咲夜

「うわああああ！！花が動けるなんて反則やあ！！」

咲夜は叫んだ。

花がしゃべれるのなら、何か言ったかもしれない。

しかし、この花にはそんな理屈は通用しなかった。

風月

「どうしようしょ！このままだと・・・あ！そういえば私・・・これ、持ってたんだっけ・・・」

風月がリュックから何かを取り出した時には、もう咲夜はラブリーフラワーに食いかかられていた。

ガバア！！

咲夜

「キャーッ！！」

パクン！！

ラブリーフラワーはそのまま、咲夜をペロリと飲み込んだ。

ゴクン!!

風月

「きゃゝッ、咲夜さんっ!!ど、どうしよう・・・咲夜さんまで
ラブリーフラワーに食べられちゃったよぉ・・・」

ギロツ・・・

ラブリーフラワーは、今度は風月の方を見た。

風月

「・・・どうやら私・・・この花をナメていたようね・・・仕方ない・・・本気を出すわ!!」

『ガアアアア!!』

ガバア!!

ラブリーフラワーは、容赦なく風月に襲いかかる。

グオオオオオ・・・

風月

リミッター

「制御装置解除!!スプゼルク!!」

カッ!

グオオオオオ!!

ビタアアアアン!!

『ガッ・・・！？』

風月

「滅せよ・・・サマザケル・スプリイス！！！」

カッ！

ピッシャアアアアン！！

『ギアアアアアア！！！！』

ラブリーフラワーは、跡形もなく燃え尽きた。

燃え尽きた場所に、無事に咲夜と美希が着地した。

トッ！

美希

「ス、スゴい・・・この化物花を一瞬で・・・」

咲夜

「何なんや！？この子の・・・この強さは・・・！！！？」

咲夜と美希は、しばらく沈黙していた・・・

第06話：ワクワク気分の宝探し／宝探しとは、英語で言うとtreasure

ラブリーフラワーの強襲を何とか切り抜けた風月達は、なぜか洞窟内にあった自動販売機からジュースを買って飲んでいた。

咲夜

「フウ、まさか洞窟内に自動販売機があるやなんて、驚きやなあ」。

美希

「そうね。私はむしろ洞窟に電気が通ってる事自体に驚いたわ。それにしても・・・」

咲夜と美希は風月の方を見る。

咲夜

「アンタ、強いなあ・・・あんな化物花を一撃で倒すなんて・・・」

風月

「あ、その事ですか・・・実は私、^{エスパー}超能力者なんですよ。」

咲夜

「何やてえ！エスパー！？」

咲夜の目は輝いている。

咲夜

「前にナギの家の本棚で『絶チル』を読んだんやけど、まさかホンマにおったとはな・・・」

美希

「スゴいわね、7歳でエスパーだなんて・・・でも、なんかズルいなあ・・・」

風月

「ええ!!どうしてですかあ!!?」

咲夜

「そやかて、ウチら何も攻撃手段ないんやもん!これから先またあんなのが出て来た時、武器とかなかったら絶対に危ないて!」

美希

「咲夜ちゃんはハリセンがあるでしょ?」

咲夜

「さっきの花に飲み込まれた時、破れた・・・」

美希

「あら、まあ・・・」

咲夜

「ウチらも欲しい!何かええ武器が!」

風月

「そんな事言われましてもねえ・・・ん?」

風月は何かを見つけ、そこへと走って行った。

タタタ・・・

咲夜

「何や？」

美希

「どうしたの？」

風月

「この2つの宝箱に何か入ってるみたいです。開けてみますね。」

ガチャ！

風月

「青い方には、鉄製のハリセンが入ってました。」

咲夜

「やった！それはウチがもらう！」

風月

「水色の方には、『コピー能力全書』と時計みたいな物が入ってます。どうやら、本に入っているチップを時計の差し込み口に入れてスイッチを押すと、入れたチップの能力が使えるみたいですよ。なぜか3つも入ってました。」

美希

「じゃあ、3人で分けましょう。」

風月達は、時計を腕にはめ、本をリュックに入れた。

咲夜

「そや！脱出するついでに、この洞窟を隅々まで探検してみようや
」

美希

「そうね、また何か手に入るかもしれないし・・・」

風月

「じゃあ、行きましょう！」

風月達は、少しずつ歩き出した。

どこかワクワク気分で・・・

第07話：現れた湖の主「チョウチンアンコウとは、英語で言うとangler

その後も風月達は洞窟を進んでいた。

一向に出口は見つからないが、その代わりに面白い発見があった。

たくさん宝物が見つかるのだ。

もしかしたら、昔の金持ちが死ぬ間際に自分の財産をこの洞窟に隠したのではないのだろうか？という疑問が浮かぶ。

何にせよ、進まなければ道は開けない。

そんなワケで、風月達は探検を続けているのだ。

咲夜

「たくさん宝が見つかるな。」

美希

「本当ね。それに敵キャラ？みたいなものもたくさん出て来たし・
」

そう、見つかるのは宝物だけではない。

洞窟内には、いわゆるRPG系ゲームに付き物であるモンスターも数多く潜んでいたのだ。

風月達は最初、宝を隠した人物がこの洞窟内に放ったのではないか
と思っていたが、どうもちがうらしい。

宝箱から手に入れたモンスター図鑑によると、このモンスター達は元からこの洞窟に住んでいたのだとの事。

もしかしたら、宝を隠した人物や後にこの洞窟に落ちた人達はこのモンスター達の犠牲になったのではないかと予想できる。

美希

「このまま脱出できなかったら・・・いずれ私達も洞窟のモンスター犠牲になるわね。」

風月

「美希さん、不吉な事言わないでくださいよぉ!」

風月は泣きながら叫んだ。

咲夜

「それにしても・・・この図鑑の最初に書かれてる『ザコ兵』って・・・名前のままだ・・・」

美希

「まあ、強いのも割といるけどな。」

そう、何も弱いモンスターだけではないのだ。

小さな兵隊やらミニズやらハチやら・・・

ついさつき会った花等は、ラブリーフラワーの少し大きくなったようなバージョンで、危うく風月達はそのメガラブリーに食べられそうになったのだ。

まあ、実際風月達はその花の舌でグルグル巻きにされ、1度ペロリと飲み込まれてしまったのだが。

体内から電流を流して花をシビレさせなかったら、今頃風月達は花のエサになっていただろう。

それを考えると、結構この洞窟は怖いと言える。

咲夜

「とりあえず、早うこの洞窟を脱出する手段を見つけな・・・」

美希

「そうだな。毎回あんな花に飲み込まれていたのでは、命がいくつあっても足りん。」

風月

「そうですね・・・ん？」

風月達は、少し広くなった湖のような場所に出た。

咲夜

「こんなトコに湖もあるとはな。」

美希

「泳いで渡るか？なぜか宝箱から水着セットを手に入れたし・・・」

風月

「あ、2人共見てください！あそこに宝箱がありますよ！」

咲夜

「おお、ホンマや！それに、今までの宝箱より少し大きいで！」

美希

「もしかしたら、洞窟を脱出する手段が書かれているかも・・・」

風月

「取りに行きましょう！」

風月達は走り出したが、その宝箱を何かの舌が捕まえた。

そのまま宝箱は引つ張られ消える。

宝箱が消えたのは、湖から現れた巨大な魚が宝箱を飲んだせいだった。

咲夜

「な、何やあれは！？」

風月

「アンコウですね、チョウチンアンコウ！」

美希

「だが、アンコウにしてはやけに大きくないか？」

そんな話を話していると、突然アンコウがしゃべり始めた。

『オマエ達、何者だ？』

風月・咲夜・美希

「きゃーッ!!?」

『誰だと聞いている。』

風月

「えっと、私達、この洞窟に落っこちちゃいまして・・・」

『そういう事か。よくわかった。ならば・・・』

風月・咲夜・美希

「な、ならば・・・?」

『湖の主である、このワシのエサになれえ!!!!』

風月・咲夜・美希

「きゃーッ!!!!」

美少女3人娘・・・

やっぱり大ピンチ!!?」

第08話：美少女3人娘の連携プレー！連携プレーとは、英語で言うとcomb

洞窟内を進む風月達。

その前に現れたのは、超巨大なチョウチンアンコウだった！！

『おとなしくワシのエサとなれやーっ！！』

風月・咲夜・美希

「イヤに決まってるでしょ！！！」

3人は即答した。

まあ、それが普通の解答だが・・・

『だが、所詮は人間だ。この部屋が水でいっぱいになれば、エサにならざるを得まい！！』

そういうと、アンコウは水を噴射する準備を始めた。

咲夜

「マズいな・・・何か方法ないんか？」

風月

「じゃあ、さつき手に入れたこれを使いましょう！」

そう言うと、風月はチップを時計に入れ、スイッチを押した。

カッ！

風月

「ウィングバージョン！やああ！！」

風月は翼をはためかせ、飛び立った。

咲夜

「ほな、ウチらも！！」

咲夜と美希もチップを時計に入れ、スイッチを押した。

咲夜

「ウチはハイジャンプや！」

美希

「私はジェット！」

咲夜と美希も飛び出して行った。

『フン、生意気に空を飛ぶ能力を使うか？だが、ワシには勝てん！！』

そう言うと、アンコウは水を咲夜目掛けて噴射した。

ブシュッ！！

咲夜

「うわっ！！」

咲夜はまともに喰らった。

咲夜が落ちていく。

美希

「咲夜ちゃん!!」

美希がジェットで突っ込み、咲夜を救出した。

美希

「咲夜ちゃん、大丈夫?」

咲夜

「お、おおきに・・・」

『ノンキに会話しているヒマがあるのか?』

美希・咲夜

「!!」

ブシュッ!!

アンコウが放った水が、美希にも命中した。

美希・咲夜

「キャアッ!!」

美希と咲夜が落ちる。

しかし、風月がすぐに2人を助けた。

風月

「うっっ・・・大丈夫ですか、2人共・・・」

咲夜・美希

「う、うん・・・」

風月

「もう少し上まで逃げましょう！上に逃げれば・・・」

『そうはいくか！！』

アンコウが天井に向けて水を噴射した。

ブシュッ！！

天井に当たった水が、風月達目掛けて跳ね返ってきた。

バシュ！！

風月・美希・咲夜

「キャッッ！！！！」

風月達は真っ逆様に落ちていく。

待ってましたとばかりに、アンコウが長い舌を伸ばした。

グルグルグルグル・・・

風月・美希・咲夜

「キャアッ！！」

風月達は長い舌に巻きつかれた。

アンコウはゆっくりと3人を引き寄せる。

風月・美希・咲夜

「ううっ……」

『さてと……いただきまあ〜す』

風月・美希・咲夜

「きゃ〜ッ！！助けて〜っ！！！！」

パクッ！！

アンコウは風月達を食べると、あっという間にペロリと飲み込んだ。

ゴクン！！

ペロリン。

『ごちそうさま〜』

咲夜

「クッ、マズいで。このままやとウチら溶かされてまう！」

美希

「え〜！何とかならないのか〜！？」

美希は泣きそうである。

咲夜

「んな事言われたかて・・・ウチらにはもう・・・」

咲夜も泣きかけていた。

風月

「大丈夫です。絶対助かりますよ。だって・・・この技があるんですから！」

そう言つて風月は咲夜と美希を引き寄せると、チップを入れ時計のスイッチを押した。

風月

「プラズマスパークッ！！！」

バリバリバリバリッ！！！！

『ガアアアアッ！！！！』

ペッ！

アンコウは風月達を吐き出した。

咲夜

「今や！ビーム波動弾！！！」

美希

「プラズマ波動弾！！！」

風月

「フォルエムル・スプリイス！！！」

ゴッ！！

ドガアアアアン！！！！

3人の必殺技を受け、アンコウは大爆発した。

第09話：まだまだ続く大冒険！冒険とは、英語で言うとadventure

アングラ・フィッシュを倒した風月達は、宝箱を開けていた。

咲夜

「何やら、これ？」

美希

「さあ・・・何かの力ギじゃないのか？」

風月

「でしょうね。尖ってますし。」

咲夜

「ほな、これは外に出るための力ギなんか？」

美希

「外に出るための力ギではないわね。こんな所にそんな力ギがあるワケないもの。大方、奥に進むための力ギなんでしょうね。ホラ、あっちに扉らしきものが見えてるし。」

美希は向こうを指差した。

咲夜

「ほな、行ってみよか？」

風月

「そうですね。行きましょう。」

風月達は扉へと向かった。

扉にカギを差し込み、風月達が扉を開けると、そこには神秘的な世界が広がっていた。

風月

「スゴくキレイですね〜・・・」

美希

「全くだ。本当にこれが洞窟の中の世界なのか？」

咲夜

「ホンマにゲームの世界に迷い込んだみたいやな〜・・・」

風月

「そうですね〜。とりあえず先に進みましょう。」

風月達は先に進み、その過程でたくさん宝を見つけた。

咲夜

「フウ〜、たくさん宝見つかるな〜。」

美希

「そうね。でもほとんどが鑑定するタイプで、敵の撃退に使える物が最初に手に入れた物だけっていうのは・・・」

風月

「いいんじゃないですか？武器がたくさんあっても邪魔なだけです。」

咲夜

「そついつもんやね。」

風月達は、また広い場所にたどり着いた。

咲夜

「またこれかいな・・・」

美希

「この展開だと、またカギの入った宝箱があつて、それを守るボスみたいなヤツが・・・」

風月

「ですよ。ところで・・・あれ、何でしょう？」

咲夜・美希

「え？」

咲夜と美希が目をやると、そこには巨大なモニターが・・・

咲夜

「今さら突っ込むのも何やけど・・・何やねん、このデカイモニタ

「は・・・」

美希

「そもそも、こんな物がここにある理由がわからん・・・」

風月

「・・・」

ポチッ。

風月はモニターのスイッチを入れた。

美希

「わああああ!!」

咲夜

「何電源入れとんねん!」

風月

「いえ、お約束かと・・・」

そんな会話をしていると、急にモニターがしゃべった。

『電源点けてくれてありがとう!誰も来ないからヒマだったんだよ
く!』

風月・咲夜・美希

「わあああああっ!!?」

風月達は驚いた。

『そんなに驚く事？この洞窟じゃ当たり前の事だよ？』

風月

「そつえば・・・さっきのチョウチンアンコウもしゃべってましたね・・・」

咲夜

「そつやつたな。」

『それより君達、ここ通りたいんでしょ？』

美希

「え？」

『ここ通らないと、どつちみち脱出は不可能だよ』

美希

「今、さりげなくイヤな事を言われた気がする・・・まあ、確かに通りたいが・・・」

『じゃ、決まりだね♪ここを通る権を賭けて・・・ボクとバトルだよ』

風月・咲夜・美希

「（テンション高いな、このモニター・・・）」

別の意味で驚いている3人娘であった。

第10話：液晶画面のモニター〜モニター画面とは、英語で言うとmonit

洞窟を脱出すべく進む風月達の前に現れたのは、巨大なモニター画面だった。

『じゃあ、この奥に進む権を賭けてボクと勝負なのだ〜!』

咲夜

「テンション高いな〜・・・」

美希

「1つ聞きたいのだが・・・」

『何?』

美希

「私達が負けた時はどうなるんだ?」

風月

「まさかまた、さっきの魚みたいに・・・」

『あゝ、魚ってチョウチンアンコウの唐揚げ君の事でしょ〜?大丈夫、ボクはアイツみたいな悪い事はしないよ〜。』

風月

「ホッ、よかった・・・」

『せいぜい、モニターの中に閉じ込めるとかだし〜』

咲夜

「アンコウより悪いわ!!」

『そうかな?ボクなりの罰ゲームなんだけど。』

美希

「しかも開き直ってるトコが余計に達が悪い・・・」

『まあ、そんなワケだから、負けないようにがんばってね。』

風月・咲夜・美希

「お・・・」

『最初の相手は、これだあ!』

パツ!

『スライムが現れた。』

咲夜

「ドラクエか!!」

『スライムの攻撃!』

風月達は身構える。

『スライムはコケた。』

美希

「どんくさっ・・・」

『風月達の攻撃！』

風月

「私達の番みたいです！」

咲夜

「よっしゃあ！」

風月達は攻撃した。

『スライムに100のダメージ！スライムは倒れた。』

咲夜

「つて、弱っ！！」

美希

「さすが、ドラクエ最弱モンスター・・・」

『君達の勝ちだね♪でも、次はどうか？』

パッ！

『踊り人形が現れた。』

咲夜

「また弱そうなヤツやな。」

『踊り人形の攻撃！踊り人形はフラフラダンスをした！』

咲夜

「何や、何ともないやないか。」

美希

「あゝ・・・」

風月

「頭クラクラしますぅ・・・」

咲夜

「な、何やて!？」

『風月と美希は混乱した。』

咲夜

「そついうワケか。」

『咲夜の攻撃!』

咲夜

「ハリセンチョップやあ!!」

『踊り人形に777ダメージ! 踊り人形は壊れた。』

咲夜

「倒れたとちゃうんか・・・」

『セアカゴケグモが現れた。』

咲夜

「待て待て待て〜！何で日本におらんヤツが出てくんねん！〜」

『それは聞かないお約束。』

咲夜

「コラ〜！！」

美希

「混乱が解けたし、今度は私が攻撃よ！」

『セアカゴケグモの攻撃！セアカゴケグモは糸を吐くを繰り返した
！』

美希

「キヤア！？」

美希はクモの糸でぐるぐる巻きにされた。

美希

「ん〜、ん〜！！」

糸で口を塞がれてしゃべれない美希。

美希はそのまま倒れた。

『美希は金縛りになった。』

咲夜

「って、強っ！！」

風月

「今度は私がやります！ウィングコル・スプリイス！！」

『セアカゴケグモに500ダメージ！セアカゴケグモは氷付けになった！』

風月

「後は・・・燃やします。サマザケル・スプリイス！！」

『セアカゴケグモに800ダメージ！セアカゴケグモは倒れた。』

風月

「大丈夫ですか、美希さん！」

風月は美希の拘束を解いた。

美希

「あ、ありがと・・・」

『倒された・・・輸入したクモまでも・・・』

咲夜

「え・・・！？」

美希

「な、何か・・・」

風月

「イヤな予感・・・」

『もう許さん！オレ様が直々に相手してやるぜえ！！おどれら覚悟しろやあ！！！！』

風月・咲夜・美希

「きゃーッ！！！！」

美少女3人娘、やっぱりお決まりの大ピンチ！！

第11話：恨み辛みの果てに、憎悪とは、英語で言うとabhorrence

『おどれら、よくもワシが大金払って輸入したセアカゴケグモまでも倒したな・・・もう許さんぞ！！ワシを怒らせた事を後悔するがいい！！』

風月

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！」

咲夜

「確かにウチら、攻撃したけど・・・」

美希

「あなたに恨まれるような覚えはないぞ！」

『確かにな・・・ワシはお主らに恨みなどない・・・ワシが恨んでいるのは、ワシらをこの洞窟に捨てた愚かなガキ共だ！！』

風月

「え？『ワシら』って？」

『ワシは、かつて数本のゲームソフトだった。ゲームソフトは、人々を楽しませ、開発者を満足させる・・・ワシはそれが嬉しかった。ところでお主ら、完全クリアしたゲームソフトはどうしている？』

咲夜

「ウチはやってない弟とかに遊ばせるけど・・・」

美希

「私も持っていない後輩にあげたりしてる・・・」

風月

「私は中古屋に売りに行ったりしてます・・・」

『そうだ、普通ならお主らのような行動が正しいのだ・・・だがワシの持ち主だったガキは、事もあるうにワシをこの洞窟に捨てて行ったのだ！』

風月

「そんな・・・」

『そして、そのガキの友人共も、この洞窟にたくさん捨てて行きおった・・・中古屋に売りさえすれば、またワシらにも活躍の余地があるというのに、あのガキ共はワシらを捨ておったのだ！ワシらは共鳴した。自分達を捨てた者共に復讐しようとして、その恨み辛みが形になったのがワシなのだ！！ワシはいわば、廃棄されたゲームソフト達の憎悪の集合体なのだ！！これを見るがよい・・・』

パッ！

モニターには、無数の骨が写っていた。

咲夜

「こ、この骨って、まさか・・・」

『そうだ。ワシらを捨てたガキ共の一部の成れの果てよ・・・ワシらは全ての者に復讐する！！この洞窟にとどまって、ずっとずっと・・・』

風月

「ダメよ！そんなの、間違ってるわ！！」

咲夜

「そうや！人を楽しませるゲームが、人を困らせる者になったらアカン！！」

美希

「今ならまだやり直せる！もうこんな事はやめるんだ！！」

『そうか・・・お主らもわかってくれないのか・・・せつかくわかってくれると思っていたのに・・・もうよい。力づくでもモニターの中に引きずり込んでくれる！！ゆくぞ、小娘共！！』

モニター画面が変身を始めた。

モニター画面から巨大な顔がはみ出した。

左右には巨大な腕が浮いている。

『ゲームの集合体であるこのワシに勝てるかあ！！』

腕を振り下ろしてきた。

咲夜

「このお！！」

咲夜は腕を殴る。

『効かぬわ！コイツはマリオの世界のイワンテの腕！！そんなみみ
つちい攻撃が効くものか！！』

風月

「イワンテの腕って事は・・・」

風月は正面から突っ込んだ。

風月

「えい！」

コッソッソ！

『ぐわあ！！』

風月

「イワンテの弱点は手の平の目！誰でも知ってるわ！ハアッ！！」

風月は両腕を破壊した。

『おのれえ・・・これならどうだ？』

腕が6本に増えた。

風月

「凍りなさい！！ウィングコル・スプリイス！！」

ピキキキ・・・

風月は6本の腕を凍らせて砕いた。

『おのれえ……ならば……』

突然、風月の足下が揺れた。

風月

「え？キャアアアア！！」

美希

「ふ、風月ちゃん！！」

地面から出てきた巨大な腕が、風月を捕まえた。

風月

「うぐっ……」

『まずはお主からだ。』

そう言うと、モニター画面は口を開き、風月を放り込んだ。

ゴクン。

咲夜

「ふ、風月ちゃん！！」

『次はお主らだ。』

咲夜・美希

「クッ……」

『フッフ・・・ガッ!?!』

突然、モニターにヒビが入り始めた。

『ガ、ガ、ガガガ・・・』

風月

「2人には手を出させません・・・シボン・スプゼルク。」

バリイイイン!!

モニター画面から風月が飛び出した。

咲夜と美希は風月に駆け寄る。

咲夜

「大丈夫か?」

風月

「はい。」

『ワシは・・・死ぬ・・・のか・・・?』

美希

「ああ・・・そっらしいわね。」

『そうか・・・願わくば・・・お主らのような優しい娘達にもっと早く出会いたかった・・・』

そう言い残し、モニター画面は大爆発した。

風月達は破片を埋めてお墓を作り、花を供えた後、宝箱を開けて奥へと進むのであった・・・

第12話：見えざる敵の襲撃／透明とは、英語で言うとinvisible

バトラスモニター（モニター画面の怪物の事です）を倒した風月達は、カギを開けて奥へと進んでいた。

咲夜

「それにしてもスゴいな、風月ちゃん！あんな技持つてるなんて・・・」

美希

「あれは何という技なのだ？」

風月

「えっと・・・『シン』の術なんですよ。私達エスパーは超能力の力が円熟期・・・レベルでいうと12か13くらいでしょうか？に達すると『シン』の術を覚えるんです。私は4つの季節の術を使うので属性は『虹』なので、虹の英語名『レインボー』から『ボ』を取って『シボン』となるんですよ。」

咲夜

「フーン・・・ほな、色によってちゃうんか？」

風月

「はい。私の友達の中には紫と金の属性の子もいますから。それより、ここから先はかなり手強いのが出て来ると予想されます。」

美希

「ああ、そうだな。気を引き締めて行こう。」

咲夜

「そやな。」

風月達が通り過ぎた後、天井に目が浮かび上がった。

『ケケケ、今のがバトラスモニターを倒した娘達か・・・なかなかやるじゃん。私の力であの3人全員とやり合うのは少々不利か・・・ならば、いつも通りのあの作戦で行こうかな。そうと決まれば、早速3人を尾行だ』

そう言うと、謎の影は再び姿を消した。

風月達は、洞窟の中を進んでいた。

後ろから尾行されている事にも気づかずに。

しばらくして、広い場所に出た。

そこには、巨大な塔がそびえ立っていた。

美希

「毎回思っのだが・・・何で洞窟の中にこういうのが立っているんだ？」

風月

「突っ込んだら負けだと思いますよ、美希さん。先を急ぎましょう。」

」

美希

「そうだな。急ごう。」

風月と美希は走り出したが、咲夜が少し出遅れた。

咲夜

「あ、待ってや！」

咲夜も急ごうとしたが、その時右足の動きが止まった。

咲夜

「キャッ！！な、何や？」

咲夜は恐る恐る振り返る。

咲夜

「え・・・キャ、キャアアア！！」

咲夜は悲鳴を上げた。

風月と美希は塔の中に入ったが、咲夜がいない事に気づいた。

風月

「あれ？咲夜さんは？」

美希

「そつえばいないな・・・どこに行つたんだ？」

『（ケツケツケツ・・・まずは1人・・・）』

謎の影のそばには、気絶している咲夜の姿があつた。

風月と美希は、塔の中を進んでいた。

風月

「だいぶ進んで来ましたが、これから先何が出て来るかわかりません。慎重に行きましょう。」

美希

「そつだな。消えた咲夜ちゃんも探さなくちゃいけないし・・・」

風月

「私、ちよつと考え事します。」

美希

「ああ。」

風月

「ウム・・・」

風月が考え事をしてい時、美希は後ろを振り返っていた。

美希

「（咲夜ちゃんは一体どこに行ってしまったんだ・・・？）ん？」

声のした方を見ると、後ろの壁から何かが手招きしているようだった。

美希

「咲夜ちゃん？」

美希は無防備にも、手招きしている方へと行ってしまった。

美希

「咲夜ちゃん、何してたんだ！私も風月ちゃんも心配して・・・え！？」

美希の目の前にいたのは、先ほど咲夜を襲った謎の影だった。

美希

「あ・・・あ・・・キャーッ！！！！」

風月

「！！！！」

風月が悲鳴のした方を向くと、美希が手を出して助けを求めている。

美希は倒れ込んでいる。

風月

「み、美希さん！？」

美希

「ふ、風月ちゃん・・・た、助け・・・キャアッ!!」

美希はズルズルと引きずり込まれていった。

風月

「み、美希さん!!待ちなさ〜いっ!!」

風月は美希が消えた場所へと走って行った。

第13話：美少女3人娘、再び大ピンチ！危機とは、英語で言うとcrisis

咲夜に続いて美希までも消えてしまい、風月は美希が消えた場所に入り込んでいた。

風月

「壁の所にこんな穴が開いてたなんて・・・あ、ビックリしてる場合じゃないわ！早く美希さんを助けないと！！」

風月は穴の中へと入った。

風月

「随分広い場所だなあ・・・美希さーん！咲夜さーん！どこですか？」

風月が叫んでも、返事はない。

風月

「もう少し先なんだろうか・・・」

風月がそうつぶやいた時、うつすらと何かが見えた。

風月

「ん？目？」

『ケケケ、バレちまったか・・・』

謎の影はようやく正体を現した。

風月

「何だ、カメレオンか・・・」

風月はそのまま行こうとした。

『待て待て待て！普通こんな洞窟にカメレオンなんかいないだろ！
？何か突っ込めよ！！』

風月

「だって、この洞窟自体が有り得ないし・・・ところであなた、咲夜さんと美希さん知らない？」

『ケツケツケツ・・・その2人なら、私が預かってるよ・・・』

風月

「な！？あなただったのね、咲夜さん達を隠したのは！！」

『その通り、私はミスター・ガメレオン！一応この塔を守護している！そういうワケで、君も捕まってもらうよ！！』

風月

「そうはいかない・・・シボン・スプゼルク！！」

風月は高速移動した。

『ケケケ、その技はさっき見てるんだよね。その技の特徴はもう・・・バレてるよ！！』

カメレオンは風月の体当たりを避けると、風月の体に舌をぐるぐると巻きつけた。

風月

「キャッ!！」

『ホーレッ。』

風月

「キャアアアアッ!！」

風月は地面に叩きつけられた。

風月

「うう・・・」

風月は気絶してしまった。

『ケケケ、捕まえた』

風月は舌で縛られたまま、カメレオンに引きずられ連れて行かれた。

それからしばらくして、風月はようやく目が覚めた。

風月

「う・・・うう・・・」

咲夜

「あ、風月ちゃん！」

美希

「気がついたみたいだわ。」

風月

「咲夜さん、美希さん！」

風月は振り返ると、辺りを見回した。

風月達は、地下室らしき場所に閉じ込められているのだ。

風月達は3人まとめて背中合わせにされ、縄で手足をぐるぐる巻きに縛られていた。

風月

「咲夜さん、美希さん。私達……」

咲夜

「ああ……どうやら……」

美希

「あのカメレオンに捕まってしまったようね……」

風月

「はい……」

美少女3人娘、またしても大ピンチ……！！

第14話：風月の機転と虹の術／虹色とは、英語で言うとrainbow

咲夜

「ウチら、あのカメレオンに捕まってしもたみたいやな・・・」

美希

「そうね・・・私達、これからどうなるのかしら・・・」

風月

「うゝん・・・ベタな展開だと、カメレオンに食べられちゃうとか？」

咲夜

「そんなんイヤやゝ!!」

美希

「まだやりたい事これっぽっちもやってないんだぞゝ!!」

咲夜と美希は泣きそうになる。

風月

「冗談ですよ!だいたいおとぎ話じゃないんですから、すぐに食べられちゃうなんてベタな展開は・・・」

風月がそう言った時、扉が開いた。

ギギギ・・・

『オマエ達、起きていたか。来い。』

風月達は立ち上がると、歩き出した。

風月達がカメレオンに引つ張られて連れて来られた場所には、大きな鍋が用意されていた。

風月

「これって、まさか・・・」

『そうだ。今からオマエ達を鍋にして食べてやる。』

咲夜・美希

「やっぱりっ！！イヤッ！！」

咲夜と美希は泣き出してしまった。

風月

「あらら、やっぱりこうなるのね・・・（待てよ？カメレオンって事は、ひよつとすると『アレ』と一緒に・・・？だとしたらいける！私達、助かるわ！！）」

風月達は鍋の上にロープで吊された。

咲夜

「イヤや、イヤやっ！！」

美希

「カメレオンに食べられて死ぬだなんて〜!!」

咲夜と美希はもがいている。

それに比べて、風月は落ち着いていた。

『さうて、誰から先に鍋に落とそうかな?』

風月

「1番は私にしてください。」

咲夜・美希

「ふ、風月ちゃん!？」

『潔い小娘だ・・・ならば望み通りにしてやろう・・・』

カメレオンは尻尾をハサミ状にすると、風月を吊しているロープを切った。

風月

「（間に合って・・・!! サラマンド・スプゼルク!!）」

バッシャン!!

風月は鍋へと落ちた。

咲夜・美希

「ふ、風月ちゃん!!」

咲夜

「そ、そんな・・・」

美希

「風月ちゃんが・・・」

『心配するな。オマエ達もすぐに後を追わせてやるよ。』

咲夜・美希

「うう・・・」

「それはどうかしら？」

『・・・え？』

咲夜・美希

「こ、この声は・・・」

ザバアッ!!

風月が鍋から飛び出して来た。

『なっ！？バ、バカな・・・!!』

風月

「シボン・フツキ・ペイントドーラ!!」

シュバッ!!

『ガアア!!』

カメレオンの色が、風月の攻撃により変わった。

風月

「形勢逆転・・・ですね」

第15話：静かな怒りの如月風月〜静かな怒りとは、英語で言つとquiet

風月

「（間に合つて・・・！！サラマンド・スプゼルク！！）」

バツシャーン！！

咲夜・美希

「ふ、風月ちゃん！！」

咲夜

「そ、そんな・・・」

美希

「風月ちゃんが・・・」

『心配するな。オマエ達もすぐに後を追わせてやるよ。』

咲夜・美希

「うう・・・」

「それはどうかしら？」

『・・・え？』

咲夜・美希

「い、この声は・・・」

ザバァッ！！

風月が鍋から飛び出して来た。

『なっ！？バ、バカな・・・！！』

風月

「シボン・フツキ・ペイントドーラ！！」

シュバツ！！

『ガアア！！』

カメレオンの色が、風月の攻撃により変わった。

風月

「形勢逆転・・・ですね♪」

『キ、キサマ、何をした・・・！？』

風月

「私の『シン』の術の力で、あなたに色をつけさせてもらいましたよ。これですばらくあなたは姿を消せませんわ。」

『お、おのれえ！！』

カメレオンは風月に飛びかかってきた。

咲夜・美希

「ふ、風月ちゃん！！危ない！！」

風月

「シボン・フツキ・チャームドフィンチ!!」

風月から放たれた巨大な鳥が、カメレオンを吹っ飛ばした。

『ガアアアーツ!!』

カメレオンは壁に激突した。

その間に風月は咲夜と美希の所へ行き、2人を解放した。

風月

「大丈夫ですか、2人共？」

美希

「だ、大丈夫……」

咲夜

「平気や……」

風月

「そうですか、良かった……」

安堵の息をする風月。

『コラコラコラーツ!!』

突然の叫び声に、風月達は振り向いた。

『オマエら、このオレ様を壁にぶつけといてノンキに友情ゴッコし

てんじゃねえぞ！！オレ様を無視するんじゃねえ！！』

風月

「アッハッハッ、うるさい人ですねえ。心配しなくても、ちゃんと相手してあげますよ。咲夜さん達を怖い目に遭わせた責任は・・・キチンととってもらうつもりですから。」

ギラッ！！

風月はカメレオンをにらんだ。

『・・・・』

咲夜

「（もしかして、風月ちゃん・・・怒つとる？）」

美希

「（っていうか・・・普段優しそうな風月ちゃんが怒ると・・・怖い・・・）」

風月

「行きますよ・・・シボン・スプゼルク！！」

『フン、ナメるなよ！オマエの攻撃はよめてんだ！今さらそんな術使ったところで・・・』

カメレオンが言い終わる前に、風月はカメレオンの真正面に来ていた。

『なっ！？』

風月

「よめてるから・・・何ですか？」

『わっ、ちよっと待て、待ってくれ・・・』

風月

「待ちません。言ったでしょう？『責任はとってもらいます』って・
・・」

そう言うと、風月はカメレオンをつかみ上げた。

『ガア・・・ア・・・』

風月

「滅しなさい・・・フォルエムル・スプリイス!!」

風月の手から炎が発動した。

『ガアアアーツ!!』

カメレオンは一瞬の内に焼き尽くされた。

風月

「あゝ、スッキリした♪」

啞然とする咲夜と美希の前に、風月は笑顔でそう言った。

第16話：最後に待ち受ける番人／最後の番人とは、英語で言っているとLast

カメレオンを倒して奥に進む力ギを入手した風月達は、扉を開けて奥へと進んだ。

咲夜

「それにしてもさっきの風月ちゃん、怖かったなあ・・・」

美希

「全くだ。あそこまで激怒する風月ちゃんは初めて見たぞ・・・」

風月

「何か言いました？」

咲夜・美希

「（ヒイ！！）な、何も言ってますん！！」

風月

「そうですか」

風月は微笑んだ。

咲夜・美希

「（ふ、風月ちゃん怖い・・・）」

咲夜と美希はそう思った。

その後も風月達は順調に歩を進めた。

途中、今まで出て来た敵がたくさん出て来て風月達に襲いかかって来たが、数々の危機を乗り越え、さらに自分達よりも強い3体の怪物を倒し、身技体共に1回りも2回りも成長した風月達の敵ではなく、風月達に瞬殺された。

襲って来たモンスターを退けたり、宝箱を開けたりしながら、ついに風月達は奥の部屋にたどり着いた。

咲夜

「ついに出了な、広い部屋に……」

美希

「そうね……それにしても、いつになったら私達脱出できるのかしら……」

風月

「たぶん、この部屋を抜けたら脱出できるでしょう。その証拠にホラ、アレ見てください。」

風月が指差した方向には、宝箱らしき物があった。

しかし、今までに見て来た宝物が入ってるタイプの箱でも、3体の怪物の部屋にあったタイプの箱のどれともちがう。

宝箱は虹色に光り輝き、今まで見て来た宝箱の中で一番けばけばしかった。

風月達3人には、この宝箱が何を意味しているのかわかった。

風月

「私の考えが合っていれば、あの宝箱に入っているのは洞窟脱出用のカギでしょうね。」

咲夜

「そやの？」

風月

「ええ。それにどうやらこの部屋で広い部屋は最後のようですし。間違いないでしょう。」

美希

「だったら、早く回収しましょう。これ以上こんな所にいるのは真つ平だ。」

咲夜

「そやな。じゃあ、サッサと回収を・・・」

風月達が近づこうとした時、突然宝箱の周りにドーム状の物が現れた。

美希

「な、何よアレ!？」

咲夜

「大方、宝箱を守るバリアーみたいな物やる。何せ、最後の宝箱なんやからな。」

風月

「望むところです・・・ギガム・スプリイス!!」

風月は光線を発射した。

光線は見事にバリアーに直撃した。

風月

「これで、バリアーも消えて・・・」

しかし、煙が晴れた後に出てきたのは、無傷のバリアーに守られた宝箱だった。

風月

「そ、そんな！私の呪文が効いてない!？」

咲夜

「風月ちゃんの術が効かんほど、強固なバリアーなんやろうか？」

風月

「だったら、もっと強力な術を使うまでです！サマザケ・・・」

その時、どこからか声が聞こえた。

『待てい!!』

風月・咲夜・美希

「え!？」

風月達は辺りを見回した。

風月

「どこ？」

咲夜

「この声はどこからや？」

美希

「声の主はどこにいる？」

『フッフ・・・ここだよ・・・オマエ達の真上・・・』

風月・咲夜・美希

「ま、まさか・・・」

風月達はソロリと上を見上げた。

『よくここまでたどり着いたな・・・ワシこそがこの洞窟最後の番人・・・』

風月・咲夜・美希

「きゃーッ!!!」

風月達は悲鳴を上げた。

『コラ、人の話聞けっ!!』

第17話：最後の番人とかつてない危機！最悪の状況とは、英語で言つとw o r

『よくここまでたどり着いたな・・・ワシこそがこの洞窟最後の番人・・・』

風月・咲夜・美希

「キャーッ！！！！」

風月達は悲鳴を上げた。

『コラ、人の話を聞けい！！』

風月・咲夜・美希

「！！」

風月達は悲鳴を上げるのを止めた。

『全く、近頃の若い者はしつけがなつとらん！！普通、人を見て悲鳴を上げるか？』

咲夜

「そないな事言つたかて・・・」

風月

「あなた、見かけからして人じゃないじゃないですか。」

美希

「そつだな。強いて言うなら化け物だ・・・」

『全く、近頃の若い者は・・・ワシはこれでも元人間だったのだ!』

美希

「元、人間!？」

咲夜

「オマエが!？」

咲夜と美希は驚いた。

『そうだ。ワシは元々この洞窟に迷い込んだ旅の者だった・・・3日3晩出口を探し続け、ついには疲れて動けなくなった。そんなワシを、当時この洞窟に元々住んでいた怪物共が襲ったのよ・・・ワシは必死に抵抗し、1匹1匹ずつ確実に数を減らしていった・・・そして、最後の1匹を倒したその時だったよ・・・ワシの体に怪物共の体の一部がついていたのは・・・ワシはもう、人間ではなくなっていたのだ。』

風月

「聞いた事がある・・・蠱毒・・・数多の動物を1ヶ所に閉じ込めて殺し合わせ、ただ1匹生き残った者を食べればその魔力を得られるという話を・・・」

『そうだ。ワシはその力を使い、この洞窟に住み着いた他の怪物共を従わせた・・・そして、もっとも目を掛けた3体を私の側近としたのだ。唐揚げ、バトラス、Mr・ガメレオの3体をな・・・』

咲夜

「アンタの目的は何や？」

『ワシの目的は、いつの日かこの洞窟を出て、部下達と共に地上世界を征服する事・・・そのためには、オマエ達をむざむざ帰すワケにはいかぬ。ここで果て、このガルムバルム・ロックの血肉となるが良いわ!!!』

巨大な怪物、ガルムバルム・ロックは風月達に襲いかかった。

巨大な手が、咲夜と美希を襲う。

咲夜

「ファイアアアア!!」

咲夜はファイアで手を熱した。

咲夜

「美希さん!アイスで冷やして!」

美希

「わかった!アイスウウ!!」

美希のアイスで急激に冷やされ、手は碎けた。

『ぐお・・・お・・・』

風月

「余所見はいけませんよ?」

風月がロックの後ろに回り込んだ。

風月

「シュプジュガロ・スプリイス！！ザマザケル・スプリイス！！フ
オルエムル・スプリイス！！ウインギコル・スプリイス！！」

風月は4つの呪文を叩き込んだ。

『ご……が……』

風月

「トドメです！ギガム・スプリイス！！」

風月は強力な衝撃波を撃ち込んだ。

『ぐわああああ……！！！！』

ガルムバルム・ロックは大爆発した。

咲夜

「やった！勝ったんや！」

美希

「私達の力で、勝ったんだ！」

風月

「イヤ……まだ……です……」

咲夜・美希

「え！？」

咲夜と美希が爆発した方向を見ると、そこには……

『ククク・・・さすがここまで来るだけはあるな・・・だが、その程度では『我』には勝てぬ・・・』

唐揚げの鱗とガメレオの皮膚をまとったガルムバルム・ロックの姿があつた・・・

周囲にはバトラスモニター状の盾が渦巻いている。

『ククク・・・次は我の番だ・・・』

ロックは口から巨大な舌を出すと、美希目掛けて放った。

美希

「あわわわ!!」

美希は走り出したが、あっという間に追いついてきた舌に巻きつかれてしまった。

グルル!!

美希

「キャアアア!!」

咲夜

「美希さん!!」

ロックは舌を巻き取り、美希を持ち上げ口の近くまで引き寄せた。

美希

「うぐうう・・・」

風月

「美希さん!!」

風月は美希を助けようと、攻撃をした。

『邪魔だ・・・』

ロックの手から放たれた光線が、風月を直撃し吹き飛ばした。

風月

「・・・ガッ・・・」

風月は倒れた。

咲夜

「ふ、風月ちゃん!!」

咲夜はロックに攻撃しようとするが、ロックの威圧感の前に怯んでしまった。

風月は倒され、美希は捕まっている。

咲夜

「も、もうアカン・・・ウチら、勝たれへん・・・!!」

愛沢咲夜を、かつてない絶望感が襲った・・・

第18話：覚醒、如月風月、覚醒とは、英語で言うとawakening

洞窟第4の番人にして、最強最後の番人であるガルムバルム・ロツク。

地上世界を征服しようとする彼の野望を止めるため、如月風月・愛沢咲夜・花菱美希の3人は戦いを開始した。

風月の4つの強力呪文に加え、ギガム級の呪文も撃ち込まれロツクは大爆発。

勝ったかと思われたが、ロツクは3体の怪物の力を借りてパワーアップ。

舌で美希を捕まえ、風月を一瞬の内に吹き飛ばしてしまう。

そして、咲夜の戦意は喪失してしまった・・・

咲夜

「ア、アカン・・・もうウチら、勝たれへん・・・!!」

咲夜はガタガタと震え出してしまう。

関西生まれの血が、本能で危険を察知したのだろうか？

『クツクツクツ・・・所詮人間の娘の力などこんなものだ・・・我には勝てん・・・さて、と・・・』

ロツクは舌で捕まえている美希をにらんだ。

美希

「ガ・・・ガラムバラム・ロツク・・・」

『何だ？小娘。』

美希

「あ、あなたなんか・・・」

『ム？』

美希

「あなたなんか、絶対に地上世界は征服させないわ!!」

少し震えてはいるが、美希の瞳は輝きを失ってはいない。

『オマエに何ができる、小娘？』

美希

「確かに、私だけじゃ勝てないでしょうね・・・でも私には今、仲間がいるわ・・・咲夜ちゃんと風月ちゃんがいる・・・」

『その2人は今、役に立たないではないか。1人は倒れ、もう1人は戦意喪失・・・もはや我の勝利は決定的・・・』

美希

「黙れえええ!!!」

『？』

美希

「オマエには見えていない・・・彼女達の中に眠る、底知れない力が・・・2人は必ず立ち上がる・・・絶対に私達はあなたを倒す！咲夜ちゃん、風月ちゃん！何してるのよおお！！早く立ち上がりなさああいつ！！！」

『フン、うるさい小娘め・・・』

ロツクは舌で美希を締め上げた。

ギリギリギリ！！

美希

「うぐあああ！！！」

美希は叫び声を上げた。

咲夜

「美希・・・さん・・・ウチが・・・助け・・・る・・・」

咲夜がゆっくりと動き出した。

美希

「咲夜・・・ちゃん・・・」

『もうムダだ。さてと・・・そろそろいたかくとするか・・・』

ロツクは大きく口を開けた。

美希

「うう・・・」

目をつぶる美希。

その時・・・

ゴアッ！！

美希

「え？」

咲夜

「な、何や・・・？」

気絶していた風月の体が、7色に輝き出した。

コオオオオオオオ・・・

『何の、光・・・？』

風月

「もう・・・これ以上・・・私の友達を・・・キズつけさせません・・・」

『ほざけ！うつとうしい小娘が！！こうなれば、オマエから片づけてくれる！！』

ロックの巨大な右足が、風月に襲いかかる。

咲夜

「ふ、風月ちゃん!!」

美希

「逃げてっ!!」

風月

「シボン・ザ・ビューティ・オブ・ネイチャー!!!!」

ガッ!!

ドゴオオオ!!

ロックの右足が、一瞬の内に消し飛んだ。

『グ、グオオオオオ!!!!』

ロックは右足を失い、ぐらついた。

『な、何を・・・した・・・!!!?!?』

風月

「コオオオオオオオオオ・・・」

風月に何が、起こった・・・!?!?

第19話：美しき花鳥風月ゝ花鳥風月とは、英語で言つとthe beauti

『な、何を・・・した・・・!!?』

風月

「コオオオオオオオオオ・・・」

風月の体は7色に光り輝き、緑・黄・赤・青の4色の翼が生えてい
る。

美希

「風月ちゃんの体が・・・7色に光り輝いて・・・」

咲夜

「何なんや？あの4色の翼は・・・」

『フン・・・所詮見かけ倒しよ・・・一気に片づけてくれ・・・』

風月

「ソルド・スプリイス!!」

ザンツ!!

風月の手から発動した7色の剣が、ロックの舌を叩き斬った。

『ガアアアア!!』

ロックの体がふらつく。

そのスキをつき、風月は落ちていく美希を助け出した。

風月

「大丈夫ですか、美希さん？」

美希

「う、うん・・・」

風月

「そうですね、良かった。」

風月は美希を咲夜の元へと連れて行く。

風月

「美希さん、咲夜さん。」

咲夜・美希

「何？」

風月

「しばらく休んで、体力を回復してください。アイツは私が・・・弱らせます！シボン・フェウシル・ライフアジオ！！」

風月が発動した球体のバリアーが、美希と咲夜を包み込んだ。

咲夜

「ちよつ、風月ちゃん・・・？」

風月

「大丈夫ですよ。その中にいるだけでも、体力は徐々に回復します。」

それにその球体はバリアーの役割も果たしますから、安心してくだ
さい。」

美希

「風月ちゃん・・・」

風月

「心配いらないですよ、2人共。私は絶対・・・負けませんから。」

風月は笑顔でウィンクすると、飛び出して行った。

『ナメ・・・るなあ!!』

ロックの左足が風月に迫る。

風月

「シボン・シュプジュガロ・スプリイス!!」

強大な緑のツルが、ロックの左足を締め付けた。

『グオアアアア・・・!!』

風月

「シボン・サマザケル・スプリイス!!」

続いて発動した雷が、左足を砕いた。

『グギヤアアア!!』

風月

「これでもう、そのふざけた足技は使えませんか。」

『おの・・・れえええ!!』

ロックの両腕が、風月目掛けて振り下ろされた。

風月

「シボン・フォルエムル・スプリイス!!」

風月の炎が、両腕を燃やした。

『グオ・・・』

風月

「シボン・ウインギコル・スプリイス!!」

熱した両腕を急激に冷やされ、ロックの両腕は砕け散った。

『グギヤアアアア!!』

ロックは後ろに下がった。

風月

「さあ、そろそろ終わりにしましょう・・・」

風月はそう言うと、バリアーを解いた。

風月

「最後は3人で・・・ね?」

美希

「ああ！」

咲夜

「そやな！」

3人は手をつなぎ、空へと飛び上がった。

風月・咲夜・美希

「終わりにしましょう・・・ガルムバルム・ロツク！！！」

3人の友情が、怪物を打ち砕く！！！！

第20話：神々しき天女・フィーリアく天女とは、英語で言つとc e l e s t i

風月

「最後は3人で・・・ね？」

咲夜

「そやな。」

美希

「ええ。」

3人は手をつなぐと、空へと飛び上がった。

風月

「終わりにしましょう・・・ガルムバルム・ロック!!」

『ほざけえ!!』

ロックは弾丸を連射してきた。

咲夜

「ウチに任し!マイク!ハイパー・ボイス!!」
♪♪♪
♪♪♪
♪♪♪

咲夜の美声が、弾丸を一掃した。

『おの・・・れえ!!』

ロックは光線を放つ。

美希

「今度は私が！！ミラー！リフレクト・ミラージュ！！」

美希の鏡が、光線をはね返した。

『グオアアアアア！！』

ロックはのけぞった。

『な、なぜだ・・・なぜオマエ達は不安を抱かぬ・・・？なぜ、絶望を抱かぬのだ・・・？』

風月

「それは・・・私達が、絶望をはね返す堅い絆で結ばれたからですよ。その絆があれば、どんな相手にも負けないんです！！」

『そういう事か・・・ならば、これをはね返してみよ・・・我と我の手下全ての力を上乘せした・・・まさに最後の一撃だあ！！！！』

ロックは超巨大化すると、風月達に向かってきた。

風月

「咲夜さん、美希さん・・・必ず3人で、一緒に帰りましょう・・・」

「

咲夜

「ああ、当たり前やないか・・・」

美希

「私達の力を、あなたに・・・」

風月

「2人共、ありがとうございます・・・ございます・・・」

美希はジェット状態で咲夜を肩車し、咲夜の上に風月が乗る。

風月は構えた。

風月

「シボン・フツキ・フェウノウス!!!!」

風月が唱えると、超巨大な鳥の精霊が現れた。

咲夜

「こ、これが・・・風月ちゃんの最大呪文・・・」

美希

「何て・・・神々しいんだ・・・」

風月

「行きなさい、フェウノウス。」

風月が命じると、フェウノウスはロックにぶち当たった。

『グ・・・オオ・・・これが・・・絆の力・・・そうか・・・我が
遠く及ばなかったのは、これのせいだったのか・・・オ、オマエ達・
・・・』

風月・咲夜・美希

「？」

『これからも、その絆を・・・大切に・・・な・・・』

それだけを言い残すと、ガルムバルム・ロックは大爆発した。

咲夜

「やった・・・」

美希

「勝った・・・」

風月

「私達、勝ったんですね・・・」

風月達は抱き合った。

その時、風月達をまばゆい光が包み込んだ。

風月・咲夜・美希

「こ、これは・・・!？」

『その光は・・・あなた方を地上への脱出口へと導く光です・・・』

風月達の前に、水色の羽衣をまとった女性が現れた。

風月・咲夜・美希

「あ、あなたは一体・・・？」

『ワタクシの名はフィーリア・・・ガルムバルム・ロックに封じら

れていた、この洞窟を守る精霊です・・・」

風月達の冒険・・・

いよいよクライマックスへ・・・!!

風月

「あなたが・・・あの怪物に封印されていた王女様？」

フィーリア「はい・・・私には悪しきものを清める力があります・・・そして私は元々この洞窟に住んでいました。彼は恐れました。自身を清められる私の力を・・・そして、私のスキについて私を襲い、奥地の宝箱の中に閉じ込めたのです。私は封じられる寸前、彼が閉じた穴を開けたのです。穴に落ちてきた者達が、きっと世界を救ってくれると。願いを託して・・・」

咲夜

「ほな、ウチらが出会ったんも偶然やないいうワケか？」

フィーリア「はい。おそらくあなた達には引かれ合う何かがあったのでしょうか。」

美希

「確かにね。ここまで来れたのも、私達がんばったからだし・・・」

「
フィーリア「そして、あなた達は見事ロックを打ち破りました。これでもう、この洞窟が悪さに使われる事はありません。感謝します。」

フィーリアは頭を下げる。

風月達は赤面した。

フィーリア『それでは、今からあなた達を地上にお送りしましょう。もう、ここには2度と来る事はできないでしょうが・・・』

風月

「え、なぜですか？」

フィーリア『私が最後の力を使って、この洞窟に2度と人が落ちないようにするのです。そうすれば、もう悪が栄える事はない・・・』

フィーリアは手をかざし、風月達を光で包み込んだ。

ポウ・・・

フィーリア『本当にありがとうございました。さよならです。』

カツ!!

風月・咲夜・美希

「キャーッ!!!!」

風月達は消えた。

フィーリア『これであの者達も、地上へ帰れたでしょう。それでもう、思い残す事はない・・・』

フィーリアの体が、透け出した。

スウ・・・

『ファイリア』さようなら．．．そして、ありがとう．．．』

シュウウウ．．．

ファイリアは消え去った。

風月

「ん．．．」

風月は目を覚ました。

風月

「私、脱出できたのね．．．」

風月の横に、咲夜と美希も倒れている。

風月

「咲夜さんと美希さんも．．．」

風月は辺りを見回した。

風月

「ありがとう．．．ファイリア．．．」

風月はいつの間にか自分の手にあった、ある物を握り締めた。

『K・F』と書かれているお守りを。

そして、咲夜と美希の手にも、『A・S』『H・M』と書かれたお守りが握り締められていた・・・

3人は握手を交わすと、それぞれの帰る場所に帰って行った。

愛沢家では、両親やメイドのハル、ナギ達が咲夜を涙で出迎えた。

花菱家では、家に入った美希に真っ先に泉と理沙が抱きついてきた。

そして、風月は如月家で、暁やコナン達に出迎えられた・・・

接点の全くなかった3人。

しかし、それ以上の何かが、3人を引き合わせたのだ。

これから3人は固い絆で結ばれていくだろう。

共に危機を乗り越え、冒険を体験したのだから・・・

如月風月の冒険記・完

第21話：目映き閃光〜洞窟脱出とは、英語で言つとcavern escape

如月風月の冒険記・イメージソング

オープニング・ゆずれない願い

エンディング・光と影を抱きしめたまま

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1746c/>

如月風月の冒険記

2010年10月10日21時26分発行